

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

虫が好きだといっても、なにからなにまでというわけではない。なんとなく気に入らない虫もいる。

ゴキブリはだれでも嫌う。私だつて、とくに好きではない。とくに、羽のないメスがいけない。そんなゴキブリがいるか。オーストラリアには、古典的な虫、つまりほかの世界では滅びてしまったタイプの虫がまだ生き残っている。ムカシタママムシなどという奇妙なグループがさかえているくらいである。ゴキブリは、昆虫の中では古い方の代表である。したがって、オーストラリア大陸には、ゴキブリの種類が多い。およそ一千種。というのはやや誇張だが、よく調べたら、そのくらいは当然いるのではないか。むろん家の中にはない。①ヤガイに住んでいる。家の中には、チャバネゴキブリのようなコスモポリタン、つまり人間生活とともに広がった、世界中どこにもいるやつである。

そのオーストラリアのゴキブリの中には、オスはふつう②一般のゴキブリ型だが、メスに羽がないのが多いのである。妻は北海道の出身だが、そもそもゴキブリに羽があることを知らなかった。ゴキブリは南方の昆虫で、暖かいところに多い。氷が張るところでは、ほとんど冬が越せない。だから、北海道には、本来まずいはずなのである。それが、ビル暖房の普及で、冬を越すようになった。そのゴキブリが、自分のアパートではじめて飛んだときに、仰天した妻は「わが家のゴキブリに羽が生えて、③チュウを飛んだ」と友人に電話をかけたのである。

妻のように④ムチでは話にならないが、ゴキブリに羽がないと、どうなるか。「ひらたいフナムシ」になる。体節すなわちエビの腹のような節が露出して、全体が節でできた、小さなゾウリに足が生えたようになる。足の数は、もちろんフナムシより少なく、六本である。その平たいフナムシが、例の速度で突然パツと走る。これがなんとも気に入らない。フナムシというのは、一匹でいるわけではない。たいていは、ゴソゴソと多数出てくる。そうなれば、恐怖映画の一シーンに見える。その⑤シヨウタイがゴキブリになるのだから、オーストラリアのゴキブリはいけない。それに混じって、足の長い、てのひらぐらいのクモが出てくる。こうなつては逃げるしかない。

わが国でゴキブリの種類が豊富なのは、たとえば別府べつぷである。⑥ガントリーが南の土地だが、それに加えて温泉がある。これがゴキブリ向きである。九州に行くと、サツマゴキブリがいる。これは第一に、体つきがやや大きい。第二に、漆黒しつこくに黒光りしている。これは、ゴキブリの中では、まだ感じがいい。つぶれそうもないし、光沢こうたくのおかげで堅いかた感じがするからである。オオクワガタなどに、幾分いくぶん似ている。ここまで来れば、もちろん私の注1偏見へんけんである。

ゴキブリが好かれないのは、だれのせいかな。むろん、われわれのせいである。チンパンジーもゴキブリを嫌う。嫌い方を見ていると⑦そっくりである。ゴキブリが背中についているのではないか。そんな感じがしようものなら、大あわてで手で払はらおうとする。そのしぐさは、人間がやるのと、ほとんどまったく変わらない。⑧こういうしぐさを見ていると、⑨のゴキブリ嫌いは

注2先天的だという気がする。しかし、ゴキブリが嫌味いやみなのは、⑩のせいではない。それを⑪のせいにするところから、「差別」が生じる。ゴキブリがゴキブリであることが許ゆるせない。しかし、ゴキブリはゴキブリであるしかないではないか。

無茶を言うなど言われそうだが、差別とは、ガントリー⑫そういうものである。相手にない性質を、相手もともと持っている性質だと決めつけてしまう。すべての差別は、そういうものである。嫌悪けんお感だと、それがよくわかる。しかし、好意こういだって、論理的にはまったく同じである。それをひいきという。その意味では、すべてのひいきはえこひいきである。恋愛れんあいをみても、それがよくわかる。

相手がゴキブリなりクワガタなら、社会問題は生じない。⑬となると、大問題を生じる。この国の人は、注3倫理りんりのかわりに「美的感覚」を導入するから、わりあい差別感を表明しがちである。自分でそれに気がつかない。「倫理」は行動の原則である。政治家の発言は、その影響えいさうから考えるなら、行動としてとらえられる。それなのに「感覚」のレベルから発言するので、政治家の差別発言が止まらないのである。

ゴキブリが嫌だからと言って、かならず殺していいというものではない。「嫌」は感覚だが、「殺す」のは行動である。感覚が行動に直結するのは、進化的にはもともと下等な神経系である。

⑭ゴキブリ殺しを平気で許容きょようする社会には、それなりの問題が自然に発生するはずである。ゴキブリを殺すための道具が、大都

会に一般に広がるのは、なぜだろうか。いまでは、ハエ取り用の長い管は、まったく見かけなくなった。これはもちろんトイレが水洗になり、人糞肥料じんふんひりょうが使われなくなったからであろう。そうしたら、次はゴキブリ。まだゴキブリがいるだけよろしい。これがいなくなったら、その次はなにか。どうもその次あたりから、⑮。子供たちのイジメの話などを聞いていると、そこが不気味である。「注4 虫<sup>4</sup>が走る」生き物というものが、人間の感性にとつて、どうしても存在せざるを得ないものであるなら、ゴキブリやクモやフナムシを、その対象として保存しておくべきであろう。その先まで、あまり進行させない方がよいように思う。これは理屈りくつではなく、感性の問題なのである。

(『涼しい脳味噌』養老孟司)

注1 偏見・・・かたよった考えや見方。

注2 先天的・・・生まれつき。

注3 倫理・・・人としてするべき道。

注4 虫<sup>4</sup>が走る・・・胸がむかむかするほど嫌でたまらない気持ちになる。

問一 — 部①・③・④・⑤・⑥のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部②「一般のゴキブリ型」は、どのようなゴキブリか。文中の言葉を使って十字以内で書きなさい。  
(句読点は字数に入れません。)

問三     部⑦・⑨・⑩・⑪・⑬に当てはまる最も適当な言葉を、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ゴキブリ      イ 人間

問四 — 部⑧「こういうしぐさ」とはどういうしぐさか。文中の言葉を使って五十字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問五 — 部⑫「そういうもの」が指している部分を解答らんにあうように文中から三十五字以内でぬき出しなさい。  
(句読点は字数に入れません。)

問六 — 部⑭「ゴキブリ殺しを平気で許容する社会」とは、どのような社会か。次の文の□部A・Bに当てはまる漢字二字を文中からぬき出しなさい。

ゴキブリが嫌という□Aを、殺すという□Bに直結させることを平気で許す社会。

問七 □部⑮に入る最も適当なものを、次から選びなさい。

- ア ちがう種類のゴキブリが出てきそうな気もするのである
- イ イヌやネコをイジメることになりそうな気もするのである
- ウ 人間は虫を殺さなくなりそうな気もするのである
- エ 対象が人間になりそうな気もするのである
- オ 新しいゴキブリ取りの道具が出てきそうな気もするのである

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〈兵士であるアクイラのむすこフラビアンは、今日もアルトスの率いる騎兵隊の練習を見に来ている。〉

馬上のアクイラの心の目は、あいかわらず①カンゼンの景色をすどおりして、昔、彼がもつと若かったころの、ルトピエ時代の兵の訓練の模様をみつめていた。騎兵隊があらから、またこちらから、ラツパの音に従っておしよせてくる。それはたえずかたちをかえる美しい②スアンのようだった。

小隊長たちのかかげる長い槍のさきについた③ハタの、宝石のような輝き、馬が走るにつれて起こる風につれて、それが炎のようになびいたものだった。冬の灰色をふるいおとそうとしている花粉だらけのヤナギや、牧場を背景にしておこなわれるその攻撃のさまは、美しく勇壮だった。

その昔のことを覚えているのか、アクイラの愛馬のインゲニアッドがやさしくいなないた。アクイラは、馬のあたたかなしめった首をたたいた。馬はもう十五歳になっていた。来年からはもう戦いにこの馬を使うまい、とアクイラは考えた。それを残念に思うのはじぶんなのか、馬のほうなのかよくわからなかった。

最後の突撃練習をすませて、アルトスが何人かの仲間たちといっしょに牧草地から駈けだしてきた。そしてヤナギの木のかたまって生えているところでうしろをむき、騎兵たちがそれぞれに小隊を集めて、夕方の炊さんの火がたちのぼっている馬の宿営④クイキのほうへと帰っていくのを見守っていた。アクイラは、芽ぶいた金緑色の枝ごしに、赤いマントと波のようになる白い雌馬の首をちらりと見た。大きなまるいひづめが土をふみならし、馬具がにぎやかに音をたて、人が大笑いしているのがきこえた――それに続いてフラビアンの声が。

⑤花粉にまみれ、ひくくたれさがった枝のかたまっているところをよけて、アクイラがまわっていくと、そこにむすこがいた。フラビアンは夕方の訓練をおえたところにながいがいなかった。アルトスの注<sup>1</sup>あぶみのところに両足をひらいてふんばり、両手をう

しろで組んでアルトスを見上げていた。<sup>注2</sup>くらの上のアルトスは、少年のほうへからだをかがめていた。

最初アクイラの感じたのは、興味のまじったいらだちだった。というのは、フラビアンが勉強をさぼって騎兵隊の練習を見にやってくるのは、これがはじめてではなかったから。

うしろ姿をみただけでも、フラビアンがアルトスを<sup>⑥</sup>あがめていることはわかった。しかし、そのよろこばしげな、熱心な態度や、小さなしゃがれ声で、「そいじや、おれが十四になったらきつとだね？もうおれ、いまだってうまく馬に乗れるんだぜ——十四になったら、きつと一緒に馬に乗せてくれるね？」と言っているむすこの声が、アクイラを鋭く傷つけた。とぼしい時間をさいてフラビアンに馬の乗り方を教えたのは、ほかならぬ父のアクイラだった。しかしむすこはいままでこんな調子で、アクイラにものをいったことはなかった。

はじめは、九年前には、アクイラはじぶんとフラビアンが友だちになれるかもしれないと願っていた。じぶんと父がそうだったような間柄の友だちに。しかしどうしたことか、<sup>⑦</sup>それはうまくいかなかったのだ。アクイラはどこが悪かったのかわからなかった。それに父と子の間柄がうまくいっていないということに気づきもしなかったのだ。しかし、きょうのようにそれに気づいた時、アクイラはひどく傷つけられた。もしかすると、その原因は、アクイラの失った何か、にあるのかもしれない……

フラビアンは、アルトスの部下になりたいという願いをのべるのにせいっぱいだったので、うしろの草地をふんでくるインゲニアドのひづめの音は、耳にはいつていなかった。

アクイラは馬をよせると、<sup>⑧</sup>かるい調子で、しかし冷たくいった。

「おい、フラビアン、おまえが楯をもつほど大きくなったら、おとうさんの部隊にはいるのかと思っていたのだが、それじゃおとうさんは、おはらいばこつてわけかい？」

フラビアンはその声でとびあがった。そしてくるりと父のほうにふりむいた。いまさつきまでその顔に輝いていた光はもう消えてしまっていた。

「<sup>⑨</sup>おとうさん——おれ、おとうさんがきたの知らなかった。」

「そうだろうな。」アクイラは言った。「聞こえなかっただろうと思うよ。だが、そんなことはどうでもいい。将来のことはその時になってからきめればいい。いまのところは、学校で、もうちょっと長い綴りを読めるように勉強しなくちゃいかん。おまえすこし、いたずらがすぎるぞ。」

そのことばのきつい調子が思ったよりもひどく少年を傷つけた。アクイラは、フラビアンの顔が突然まっさおになり、みじめな表情をうかべたのをみた。しかしその表情からは、誇りは失われていなかった。それはフラビアンが、泣きたい時に、着物みたいに身に着ける表情だった。

アルトスがかがんで少年の肩かたに手をふれようとして、思いとどまるのを、アクイラはみた。突然アクイラは、事のゆきがりはどうあれ、つぐないをしてやらなくてはと考えついた。アクイラは強しいてほほえみを浮かべると、いそいでいった。

「<sup>⑩</sup>しかしきようは忘れることにしよう。おまえもせつかくここにいるのだから、役にたつておくれ。インゲニアッドに乗つてうちへおかえり。おれは帰りがけに、ハヤブサがどれくらい走れるか、ひとつためしてみるから。」

フラビアンがもう長いことインゲニアッドに乗りたがっていたことを、アクイラは知っていた。だからアクイラは、フラビアンがうれしさのあまり<sup>⑪</sup>コウフンするにちがいないと、当然のことのように思っていた。たしかにフラビアンはうれしそうな顔をした。しかしそれはつかのまのことで、すぐに消えてしまった。フラビアンはいった。「はい、おとうさん。どうもありがとう。」しかし、その声にはいつけられたことをはたすのだという調子があった。馬からおりたアクイラは、<sup>⑫</sup>それには気づかぬようなふりをしていた。そして替馬かえりまのハヤブサをつれてくるように部下のひとりにいつけた。アクイラは、これはいったいどうしたことなのだろう、と内心<sup>⑬</sup>いぶかった。アクイラは少年をくらの上に押しあげた。「ほら、いくぞ。しっかりつかまれ。」アクイラはそういったが、その声はわれながらわざとらしく思えるつくり声だった。アクイラは、あぶみの綱つなをみじかくした。そうしながら、アクイラは何が悪かったのかに思いあつた。

フラビアンが長いあいだ望んでいたのは、何か偉えらいことをやってのけたほうびとして、インゲニアッドに乗せてもらうことだったのだ。それは晴れがましい場で、ラツパのとどろきわたるような時でなければならなかったのだ。しかしそれなのにアクイラは、

おしおきにおしりをひっぱたいておいてから、あとであまいハチの巢のひとかたまりをくれてやるようなことをしてしまったのだ。おれはまたやってしまった。アクイラは思わずうなり声をあげるところだった。まあしかたがない、<sup>⑭</sup>もうおそい。

インゲニアッドの<sup>注3</sup> たづなをまだしつかりと握りながら、アクイラはハヤブサに乗った。そしてすでに動きはじめたほかの連中のとを追って、二頭の馬を、家のある遠い城壁の方へ進めていった。

背の高い赤い馬の背に乗ると、フラビアンはひどく小さくみえる、父親はちらりとかたわらのむすこをみて思った。フラビアンは、背をまつすぐにのぼしてくらの上にすわり、目を輝かせていた。結局のところ、<sup>⑮</sup>これはそれほどひどいまちがいではなかったかもしれない。アクイラは少年の顔に、父に何かをたのむような表情のあらわれているのを見て、その意味を理解した。フラビアンは、父にたづなをはなしてもらいたいのだった。アクイラはためらった。しかし、インゲニアッドは、一日の仕事のおわったあとだったから、しずかだった。インゲニアッドは長いことフラビアンを知っていたし、愛してもいた。そして厩にかえった時、フラビアンがそのくらの上によじのぼるのになれていた。インゲニアッドならフラビアンに荒いことはすまい。アクイラはたづなをはなした。

そのすぐあとで、<sup>⑯</sup>事は起こった。もし呪いのことを吐きちらす時間があったとしたら、アクイラはおもいつくかぎりの名まえを口にして呪ったことだろう。事はひどくすばやく起こった。はじまったかと思ったら、もうおわってしまったのだ。

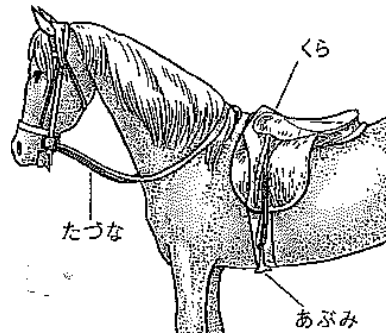
夜の狩に出かけるにはまだ早いのに、羽の白いフクロウが、ハンノキの枝から音もなく飛びたち、幽霊のようにやわらかな羽をひろげて、インゲニアッドの鼻づらをかすめんばかりに飛んだのだった。

(『ともしびをかかげて』ローズマリ・サトクリフ作・猪熊葉子訳)



注1 あぶみ  
注2 くら  
注3 たづな

乗馬のとき、馬につける道具。



問一 — 部①・②・③・④・⑩のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部⑤「花粉にまみれ……」とあるが、このとき、「アクイラ」は「むすこ」の「フラビアン」を見てどのような気持ちでいるのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア いつ来るかわからない父親とインゲニアッドを、ずっと待っているむすこのおるかさにあきれる気持ち。
- イ 親しみをもって話し合える親子になりたいのに、全くそうするつもりのないむすこに対するいらだたしい気持ち。
- ウ 馬の乗り方を教えてやったことは忘れてしまって、ひとりでうまく言ったと言っているむすこにがっかりする気持ち。
- エ なぜ今日もまたむすこは勉強をさぼって、騎兵隊の練習を見に来て何を樂しげに話しているのかという腹立たしい気持ち。
- オ 家や学校からこんなに遠い練習場まで、いつのまにかひとりで来られるようになったむすこにびっくりする気持ち。

問三 — 部⑥「あがめている」⑬「いぶかった」は、どのような意味か。それぞれ最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

⑥ ア 好きである      イ 兄弟のように思っている      ウ うらやんでいる

エ 尊敬している      オ 親しみを感じている

⑬ ア なんとなく変だと思った      イ 腹立たしく思った      ウ 苦々しく思った

エ 信じられないと思った      オ 物足りなく思った

問四 — 部⑦・⑫・⑮の「それ」・「これ」とはどのようなことを指すか。⑦・⑮は二十字以内、⑫は三十字以内で書きなさい。  
(句読点は字数に入れません。)

問五 — 部⑧「かるい調子で、しかし冷たくいった」理由として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア フラビアンという言葉や態度は仕方がないことなのだと思う、自分のほうもむすこには何も期待していないのだということ  
をわからせようと思ったから。

イ フラビアンの言葉や態度は仕方がないことなのだと思う、父親の部隊よりも、アルトスの部隊の方がむすこにはふさわ  
しいのだと考えたから。

ウ フラビアンの言葉や様子に傷ついている自分の気持ちをかくそうと思うが、今は勉強することも必要だということを父親  
としてむすこにわからせたいから。

エ フラビアンの言葉や様子に傷ついている自分の気持ちをかくそうと思うが、父親の部隊でなくアルトスの部隊に入りたい  
というむすこに失望をおさえられないから。

オ フラビアンの言葉や態度はいつものことなのであきらめがつくが、せっかく馬に乗れるようにしてやったことに感謝して  
いる様子もないことが腹立たしいから。

問六 ——部⑨「おとうさん——おれ、おとうさんがきたの知らなかった。」とあるが、このとき「フラビアン」はどのような気持ちでいるのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア インゲニアッドのひびめの音ならよく知っているのに、今日は聞き逃してしまったことをくやしく思う気持ち。

イ 父親を待っていたのに、どうして声をかけられるまで気づかなかったのかふしぎに思う気持ち。

ウ アルトスの前でしかられるのが恥ずかしく、突然現れた父親になんとか言い訳を聞いてほしい気持ち。

エ 本当は父親の部隊に入りたいと思っているのに、父親に誤解されてしまったことにびっくりする気持ち。

オ 突然現れた父親に、アルトスの部隊に入りたいと言っているのを聞かれてしまい、後ろめたく思う気持ち。

問七 ——部⑩「しかしきょうは……」とあるが、このとき「アクイラ」はどのような気持ちでいるのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 年とった馬のインゲニアッドをこれ以上戦いに使いたくないと思っていたところだったので、ちょうどよい機会だから替馬のハヤブサを訓練したい。

イ フラビアンがどんなに勉強をさぼっていたほうが本当は大した問題ではないのだから、きつい言い方をしてしまったことを早く忘れてしまいたい。

ウ 自分がきつい言い方をしたことで傷ついたフラビアンが泣きそうな顔をしているので、何かむすこが喜ぶようなことをしてやりたい。

エ 怒りをおさえているフラビアンをアルトスがなだめられないので、やはり自分からあやまってむすこ仲直りをしたい。

オ 悲しそうな顔をしているフラビアンをいつまでもここにいさせるわけにはいかないので、早くうちに帰すための口実をみつきたい。

問八 ——部⑭「もうおそい」とあるが、どのようなことに対しておそいと思っているのか。最も適当なものを次の中から選び、

記号で答えなさい。

- ア ハヤブサを連れてこさせてしまった今になって、やはり今日はハヤブサに乗るのをやめると言い出すということ。
- イ 強くしかつたつぐないに馬に乗せるようなやりかたはまちがっていたと今になって気づいたということ。
- ウ インゲニアッドのような背の高い馬に乗せるには、まだフラビアン体が小さすぎたことに気づいたということ。
- エ 怒りにまかせておしおきにおしりをひっぱりたいたりしてはいけなかった、ということに気づいたということ。
- オ 今は訓練の終わりで、ラツパのとどろきわたるような時ではなかったことに気づいたということ。

問九 —— 部⑩ 「事は起こった」とあるが、このあとのようなことが起こったと考えられるのか。四十字以内で説明しなさい。  
(句読点は字数に入れません。)

このページには問題はありません